

聖書：ガラテヤ 6：11～18

説教題：私たちの誇り

日時：2013年10月13日

パウロは11節で「ご覧のとおり、私は今こんなに大きな字で、自分のこの手であなたがたに書いています。」と言います。「こんなに大きな字で」とは何を意味しているのでしょうか。時々、これはパウロの目が悪かったことと関係しているのではないか、と言われます。これがⅡコリント12章に出てくるパウロの「肉体のとげ」だったのだろうと推測する人たちもいます。しかし多くの学者は、これは強調のための大きな字なのだろうと言っています。パウロは他の手紙と同じように、ここまでは他の人に筆記してもらい、この最後の部分で自らペンを取ってサインをしているものと思われます。Ⅱテサロニケ3章17節：「パウロが自分の手であいさつを書きます。これは私のどの手紙にもあるしるしです。これが私の手紙の書き方です。」パウロはこのガラテヤ書では、自らペンを取ってサインを記す際に、もう一度自分の言いたかったことを、はっきりした字で、目立つ字で、書いたのでしょう。そういう意味で、ここにはパウロが伝えたかったメッセージのエッセンスが凝縮されていると見ることができます。

そう述べてまず彼が触れたことは、あなたがたに割礼を強制する人たち、すなわちユダヤ主義者たちについてです。まさにこの人たちが引き起こした問題のために、パウロはこの手紙を書きました。この人たちはパウロが宣教した後に、ガラテヤ地方に入って来て、「信仰だけでは足りない。割礼も受けなければ救われない。」と教えた人たちです。その彼らについて、三つのことをパウロは述べています。

一つ目は彼らは「肉において外見を良くしたい人たち」ということです。信仰あるいは宗教において大事なのはまず心のこと、内側のことでしょう。しかしユダヤ主義者たちが気にしていたのは外見でした。彼らは表面的なことにばかり関心を持っている、とパウロは言います。

二つ目は、彼らはただキリストの十字架のために迫害を受けたくないだけであるということです。ここに彼らの活動の動機が示されています。十字架のメッセージはつまずきのメッセージです。これは「あなたは罪人であって、自分で自分を救うことはできない。そんなあなたのために身代わりに死んでくださったキリストの前に、あなたはひれ伏さなくてはならない。」というメッセージを送るものです。これは人間のプライドに挑戦します。そしてこのメッセージを伝えたクリスチャンたちはユダヤ人から迫害されました。使徒の働きを読めば、クリスチャンたちがユダヤ人によっていかに激しく迫害され、世界の隅々まで追いかけて行っただけが分かります。ユダヤ主義者たちも、この迫害を受けたくないと考えていました。同胞ユダヤ人からそのように敵視され、さげすまれ、迫害されたくない。つまり彼らの心の根っこには恐れがあったのです。

三つ目は、彼らは「あなたがたの肉を誇りたい」ということです。ユダヤ人にとって割礼はものすごく大事です。ですから異邦人世界に出て行って、どれくらいの人に割礼を受けさせたか、ということはその働きの成功の指標となります。宣教師がミッション・ニュースレターを

発行して、何人救われましたかとか、何個の群れを誕生させました、と報告するようなことに似ています。この場合、数が大事です。実際にそこの人々が律法を守る生活をしているかどうかなどということはあまり重要ではありません。第一、ユダヤ主義者たち自身、律法を守っていないとパウロは言っています。ただどれだけ多くの異邦人に割礼を受けさせ、それによってユダヤ人社会から賞賛を得るかということが大事なのです。つまり彼らはこの世の成功者でありたかったのです。異邦人の肉を誇り、数的な成功を誇り、人々から認められるという外側のことに一生懸命になっている人たちだったのです。

しかし、とパウロは14節以降で自分の立場について語ります。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」パウロはここで世の人々がさげすみ、またユダヤ主義者たちが恥としている十字架こそを私は誇ると明言します。今日、教会堂の屋根の白い十字架や、ネックレスの十字架を見るのに慣れている私たちには、このパウロの言葉の衝撃がよく分からないかもしれません。十字架は当時のローマの極刑の方法であり、人々が最も関係を持ちたくないもの、思い浮かべるだけで身震いするような、卑しみの極みの象徴でした。その十字架を誇るなどという言葉は、それだけで意味をなさないような言葉でした。しかしパウロはそれを誇ると語るだけではなく、それのみを誇ると告白しているのです。

しかし、十字架の福音を真に受け取った人は、このように告白する以外のことは考えられないでしょう。なぜなら十字架は、神の私たちに対する計り知れない愛の現れだからです。本来は私たち一人一人が自分の罪のために、十字架にかからなければなりません。なのにそんな私たちを救うために、神は尊い独り子を私たちの代わりに十字架につけ、この方を信じる私たちは罪を清算され、赦しと義を頂く者となりました。そして永遠のさばきに服さなければならなかった私たちが永遠に天の御国で神と共に住む者となりました。このことを思うなら、どうして私たちは十字架をさげすみ、他の人と一緒に見下す態度など取ることができるでしょうか。私たちはこれを誇らずして、一体他の何を誇るべきでしょうか。

14節後半は、キリストの十字架を知った者は、全く新しい価値観のもとに生きる者となったということを言っています。そこに「世界は私に対して十字架につけられた」ということと、「私も世界に対して十字架につけられた」という二つのことが書かれています。まず「世界は私に対して十字架につけられた」というのは、世の価値観は今や私にとって何の意味もないものとなったということです。パウロもかつてはこの世の賞賛を得るために苦心しました。人々からの評価や名声、この世の地位や財産、祝福を得ることが彼の活動を動機づけていました。しかしそういった世界は、今のパウロにとってなんの魅力もなくなったのです。彼の心を占めているのは、ただキリストの十字架の栄光だけであるということです。

もう一方の「私も世界に対して十字架につけられた」というのは、かつてこの世の価値観に魅了されていた古い自分も死んだということです。だからもう、以前の生き方はしないということです。今やこの世からどう見られても関係ないということです。今のパウロにとってはキ

リストとその十字架こそすべてであるということです。

このようなイエス・キリストの十字架により頼む者には何が与えられるでしょうか。パウロは 15 節で、それは「新しい創造」であると述べています。キリストの十字架により頼むことは、この世の価値観から見れば愚かなことであり、またこの世から迫害を受ける道を行くことを意味しますが、そこに待っているのは新しい創造であり、神の恵みによる変革です。この世界は創世記 1 章に記されていますように、神の天地創造のみわざによって造られました。その後、人間は墮落して、多くの神の祝福を失ってしまいました。そんな私たちはずっとその状態で生き続けるのではありません。キリストにある者に与えられるのは、天地創造に比較し得るような新しい創造のみわざです。再創造のみわざとも言えます。私たちはキリストの十字架によって罪が赦されるだけでなく、神の新しく造り変える力に生かされる者となるのです。新しい心、新しい知性、新しい意志を頂き、御霊によって歩み、御霊の実を結び、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」との愛の律法を全うし、イエス・キリストに似る者とされる道を進むのです。これに比べたら、割礼を受けているか受けていないかは全くどうでも良いことです。それは私たちに何ら重要な変化をもたらしません。外見がちょっと変わっただけです。パウロはそれよりもはるかに大事なのは新しい創造です、と言っています。これはキリストの十字架により頼む人に備えられている神の特別な恵みなのです。

こう語って後、パウロは 16 節で「どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。」と祝福の祈りを祈ります。このキリストの十字架により頼み、新しい創造のみわざにあずかる人こそ、神のイスラエルです。最後の 17～18 節の結びの言葉も、もう一度最後のアピールをするものとなっています。そこに「これからは、だれも私を煩わさないようにしてください。」とあります。パウロはもちろん、必要であるなら喜んで人々のため、福音のために、労苦する覚悟はあります。ですからここまでこの手紙も書きました。しかし使徒としての権威を示して、もう私を煩わさないように、という彼のアピールの真意は、それだけイエス・キリストの十字架の福音により頼み、その祝福に生きる者となってほしいとのアピールに他なりません。「焼き印」とは、使徒としての彼の肉体に刻まれた様々な労苦や苦みの跡のことでしょう。パウロはそれを誇っているのではなく、またそれによって上からもものを言おうとしているのでもなく、キリストの使徒であることの見えるしるしを示しながら、このメッセージに聞いてほしいと訴えているのです。そして最後 18 節では、ガラテヤ人たちを兄弟たちと認めて、彼らのためにキリストの「恵み」を祈っています。人間の手で割礼を施し、人間のわざで救いを勝ち取るのではなく、ただキリストの恵みに頼って救われ、キリストの恵みによって新しい変革の歩みを導かれて行くこと、ここに神が真のイスラエルに備えたもう祝福があるのです。

私たちは何を自分の誇りとしているのでしょうか。ユダヤ主義者たちのアピールが力を持つのは、それだけ私たちの内にも、ともするとそれらに引き付けられ、それらを誇ろうとする傾向があるからに他ならないでしょう。外見を良くしたい、体裁を良くしたい、内側のことより外側を整えて体面を保ちたい。また迫害されたくない、見下されたくない、なるべく嫌な仕事は避

けて通りたい。むしろ人々の間で評価されたい、素晴らしい業績を上げたと言われたい、人生の成功者として尊敬されたい。しかしパウロは、そういったユダヤ主義者たちの道を進んでも、真に大事なことは何も得ないと言っています。私たちはこのような人の評価に振り回され、人間の肉を誇ろうとするユダヤ主義者たちの主張に惑わされず、キリストの十字架こそを私たちの唯一の誇りとして高く掲げたいと思います。このキリストの十字架こそ、神が私たちを救うために与えてくださった唯一の救いの方法です。キリストの身代わりの十字架の死にこそ、私たちの罪の赦しと永遠の命、そして新しい創造があります。たとえ周りの人がどんなに私たちを見下げようとも、またそのことで嫌がらせをしてこようとも、このキリストの十字架こそを誇り、神が与えてくださったかけがえのない救いの祝福に歩みたいと思います。そしてそこにある新しい創造の力にあずかり、その姿をもって一切の栄光をただ神にのみお返しする神のイスラエルの歩みへ導かれたいと思います。